

23. 上藻の土に生きる

菊地金吉

※明治38年2月19日生、父忠海郎。

着手小屋と道路

父に連れられて、上藻8号の現在地に入殖したのは、大正3年3月18日です。大正2年に和寒に入り、そこは剣淵との境近くで、新田鶴一さん等も近くに入殖していました。

父は、大正2年の秋に上藻に来て、一足先に入地していた新田さんの着手小屋に泊めてもらいながら、自分たちの居住する小屋を作ったのです。

しかし全部を完成できず、新田さんの近くに居た木村（岩吉）という柵屋に、立木と交換条件で、屋根や壁をつけてもらう約束で、一先づ和寒に帰ったのです。

3月に、和寒の知人に、馬2頭で荷物をつけてもらい、上藻に入りました。

六興の青木さん附近から川を渡り、沢を登って田中さんの沢を下るといふ、沢ばかりの悪い道で、僅かばかりの荷物でも、余りにも急な坂道なので、人で担き上げて漸く運びました。

上藻へ来てみると、去年約束していた家は完成しておらず、止むを得ず上藻2号で、大沢時之丞さんがまだ独身で、造材の飯場をしていたので、此所に4晩ほど泊めてもらい、その間に、着手小屋を急いで入居できるように作ったのです。

最後の夜に、中原紋次郎（父増吉）さん等が、湧別方面から入地して来て、一緒に泊まったが、余りに狭く気の毒なので、私たちは、まだ十分出来上がっていない着手小屋に移りました。

着手小屋は、2尺の割り柵で屋根を葺き、壁は、3尺の割り柵で、床はタモの木を長さ6尺位に伐ったものを、厚さ1寸位に割って並べ、その上にむしろを敷いたものでした。しかしこれらは良い方であって、当時の着手小屋は、屋根も壁も笹で囲ったのや、タモの木の皮をむいて、屋根壁に使ったのもあり、床も丸太を並べたり、土の上に、松の枝を敷き、その上にむしろを敷いたのが多く、中には、拝み小屋もありました。

上藻へ入る道路は、六興から中藻へ出る道と、瀬戸牛峠を越える道、忍路子の五六峠を越える道などがあり、この中で六興から越える道が一番良くて、瀬戸牛峠は馬は通れなかったようです。

私たち8号近くのものは、少ししてから、忍路子中田さん附近から、6号の神社の沢へ抜ける踏み分け道をつけて、これが一番近かったので、ハッカを作るようになってから、忍路子で頼んだ出面の人は、此所を利用しました。

サックル峠も刈り分け道しかなく、大原、白石、吉江さん等は、ここを歩いて入地したそうです。

こんな風に、上藻への道は険しくて、その上に悪く、大正13年ころになって、殖民道路として正規の開き道ができて、お茶の水沢を迂回して市街に出れるまでの10年余りは、上藻や中藻の人たちは、どんなに苦労したかわかりません。

白い土産子馬

大正3年に、近くに住む滝さんと共同で、洋種馬を38円で購入し、雑穀運搬や荷上げ、開墾にも使用しました。

その後、土産子できん抜き馬を購入しましたが、この馬は真白で、目まで白い珍しい馬でしたので、削った蹄が病気に効くということで、滝上方面からもらいに来る人があ

りました。

この馬で、ナタ付プラウを使って開墾をやりました。当時年令20才と言われ、最後には、桜田留五郎さんが木炭焼きに使い、市街まで、木炭運搬をしていたのがこの馬です。この馬は年令38才まで生きてそうで、身長は4尺2寸しかなく、土産子が、この村で飼育された最後ではないでしょうか。

大正3年ころは、上藻ではまだ馬を持っている人が少なく、大正5年以降になって普及されたようです。

その頃は、和種（土産子）洋種、雑種と様々で、種馬は、七重の原田（鉄五郎）さんが、中間種の栗毛流星を持っていて、村では一番早く、後になって、宇津にいた西浦（喜三郎）さんが、種付に出張して来ていました。

ハッカ成金

ハッカは、塩見さんが居られる処に、田中さんと言う人が居て、ここから種根を分けてもらい、大正4年秋に1反歩ほど植え、それから増殖して行きました。

最初は土地の良い処に植えたので、反当5組（1組はビールビン2本で、1本1斤で、首組200斤で1駄という）もとれ、鉄道開通直前だと思いますが、一組32円で、180組売ったことがあります。これは滝上に運んでの価格です。

私の家だけで、最高6町歩のハッカ作付をし、300組を穫り、6千円の収入を挙げたことがあります。

当時は年間の経費が1,200円位で賄えたのですから、6千円は大金だったので。そのほか長うずら等も、世界大戦後の好景気で価格もよく、また澱粉（賃ずり）もありましたので、これらも売ると年収は大きかった訳です。

普通の農家は、600円から700円位が平均年収だったので、私の家は、ハッカ成金などと言われたが、それなりに努力もいたしました。

父は、外に出るときは腰から袋を離したことがなく、雑草を見つけると、抜き取って必ずこの袋に入れたものです。よそでは、除草のために出面をよく頼んでいましたが、私の処では頼んだことはありません。

とに角、開拓当時から、無肥料で収穫できる間に、一生懸命に働き、一方で生計を節約すれば、何とかなつたのでしょうか。

ハッカ成金などと言われても、決して濡れ手に粟で儲けたのではなく、私の家はそういう主義で通したからです。

一つの例ですが、右けんなども使わず、赤ダモの木を燃やして、固まった灰を石けん替りに使ったりして、出費の無駄を努めて無くしたものです。

またハッカの話になりますが、上薬で100組（200斤）のハッカ取卸油を収穫できる人は少なく、白石さん、大沢延平（信一の父）さん、大沢藤五郎さんぐらいだったでしょう。私は今でも100組ほどの収穫を挙げております。開拓に成功するのは、運もあるだろうが、努力だったと思っています。